

崔箕杓氏のコメントに対する回答

張風雷（中国 人民大学）

初めに崔箕杓教授が私の論文に対してコメントしてくださったことに感謝申し上げます。崔教授はずいぶんと遠慮しておられますが、私自身はこの論文が天台大師の仏性論に関する全面的かつ系統だった「総合的考察」と称するにはほど遠い内容だと思っております。

例えば、「六即」などの教学においても天台大師の仏性論は色濃く表れていますし、さらにいえば、天台大師の仏教思想のすべては仏性論という観点から総合的に考察を加えることができます。しかしながら、紙幅の関係で今回は関連する多くの論点には言及せず、「五仏性」と「性具善悪」という天台の仏性論の中でも最も特色ある二点に絞って論述を加えました。智顛の仏性論の全体像を明らかにするには、まだまだ行うべき研究が多く残っております。

崔教授にはコメントでいくつかの重要な問題を提起していただきましたが、これらはいずれも核心に迫るもので、また当然のことながらとても難しい問題でもあります。崔教授の提示なさったこれらの問題は、中国の仏性論や天台宗の思想研究においては、今回、私が論じた問題よりもさらに重要な意義を持つものであるとすら感じております。そこで、ここではこれらの問題に対する若干の初歩的な回答を試みつつ、ご列席の専門家の皆さまからご意見とご叱正を賜りたいと思います。

1 仏性の「本有」・「始有」に関する問題

仏性の「本有」・「始有」は、『大涅槃経』に始まる問題です。『大涅槃経』の「貧女宝蔵」の比喩（北本卷七「如来性品」第四之四、T12.P407b；南本卷八「如来性品」第十二、T12.P648b）、「力士額珠」の比喩（北本卷七「如来性品」第四之四、T12.P408a-b；南本卷八「如来性品」第十二、T12.P649a-b）、「薬山妙薬」の比喩（北本卷七「如来性品」第四之四、T12.P408b-c；南本卷八「如来性品」第十二、T12.P649b-c）は、い

ずれも仏性の「本有」の義を有するものです。

一方、『大涅槃經』の中でも「売乳不責酪値」と「売驛馬不責駒値」（北本卷二十八「師子吼菩薩品」第十一之二、T12.P531a；南本卷二十六「師子吼菩薩品」之二、T12.P775c）の比喩は、仏性の「始有」の義を有するものであります。

南北朝時代の中国の仏教学者が『大涅槃經』を解説するにあたり、仏性の「本有」か「始有」かに対しても、様々な見解が行われていたようです。例えば、道生には「仏性当有論」がありますが、道生が説く「当有」は「始有」ではなく「本有」のことであって、のちに「始有」が「当有」と称されるところの「当有」とは異なるとするのが学界の通説です。

道宣の『続高僧伝』巻七の「道寵伝」には以下のような記述があります。

一説云、初勒那三蔵（すなわち勒那摩提）教示三人、房・定二士授其心法、慧光一人偏教法律。菩提三蔵（すなわち菩提流支）惟教於寵。寵在道北教牟・宜四人、光在道南教憑・範十人、故使洛下有南北二途。当・現両説、自斯始也。四宗・五宗、亦仍此起。（T50.P482c）

ここにいう「当・現両説」とは、仏性の「始有」と「本有」を指したものです。これによれば、中国仏教史における南北朝の仏性の「本有」と「始有」の争いは、地論師の南北二道に端を発することがわかります。学界では、勒那摩提・慧光の系統である地論宗南道派は阿頼耶識を真常淨識とし、仏性の問題においては「本有」（すなわち「現常」）を主張したのに対し、菩提流支・道寵の系統である地論宗北道派とやや遅れて登場する撰論師は阿頼耶識を雑染識とし、仏性の問題においては「当有」（すなわち「当常」）を主張したと考えられています。しかしこの問題については、更なる詳細な研究を待たなければならないと思います。地論師と見なされる淨影寺慧遠と撰論師と見なされる真諦三蔵のように、その仏性論はいずれも複雑で、恐らくは単純に仏性の「本有」か「始有」かを主張していたわけではないからです。

『大涅槃經集解』から見る限り、南北朝における仏性の「本有」「始有」の見解は複雑で、一律に論じることは困難です。『集解』の中で頻繁に引用される道生・僧亮・法瑤・智秀・曇織・法智・僧宗・道慧・宝亮は、みな仏性の「本有」を論じています。ところが、僧亮・僧宗・宝亮は『大涅槃經』の「師子吼品」を解釈する際に、「本有」と「始有」を取り交ぜて述べています（T37.P549c-557c）。私は張文良教授と敦煌秘笈

271号を講読していますが、その中には法瑤・智秀・曇織・僧宗・宝亮の論争に関する記述が見られます。これらの資料は相互に比較研究すべき価値があると思います。現存する資料から見て、智顛の時代に「本有」と「始有」の説を融合することは仏教界に一致をもたらす主張でしたが、各思想家それぞれの論証の視点と方法は、結局のところ、同じではなかったのです。

2 仏性の「是因非果」「是果非因」「是因是果」「非因非果」の典拠に関する問題
コメントで言及された論文の注11、『観音玄義』巻上に引用される『大経』の一段は、南本『大涅槃経』巻二十五「師子吼品」第二十三之一（T12.P768b21-24）、及び北本『大涅槃経』巻二十七「師子吼菩薩品」第十一之一（T12.P524a13-15）に見られます。二箇所 of 文言は完全に一致しており、下記の通りです。

是因非果如仏性、是果非因如大涅槃、是因是果如十二因縁所生之法、非因非果名為仏性、非因果故、常恒無変。

また、『大般涅槃経集解』巻五十四「師子吼品」第二十三之一には、上述の経文に対する道生・僧亮・僧宗・宝亮の解釈が記されています（T37.P548a-b）。

3 「法華経至上主義」と「円教至上主義」の問題について

私は崔教授の意図は、宗学の立場から学術研究を行うことに対する批判にあると拝察しますが、これに関しては私も全く同じ意見です。事実、私はこれまで天台学関係の論文の中で「法華経至上主義」や「円教至上主義」といった表現を一度も使ったことはありません。ここ（注3）で用いたのは、かりに「法華経至上主義」か「円教至上主義」のどちらか一方を選択しなければならないならば、私は「法華経至上主義」ではなく「円教至上主義」を選ぶということを表明したいがためです。もちろん、「至上主義」というような表現を使わないのが一番です。このような表現は絶対主義的な意味を帯びています。

智顛の教判についていえば、彼の教判の主観的な意図は、宗派を創立するためなどは考えられません。智顛が教判を用いた主な目的は、仏説の形式や内容などから各種の仏典間に生じた矛盾や相違を調和し融通せんとし、あらゆる仏典がすべて仏の説法であって、仏陀が異なる時節や衆生の異なる機根に対するものであったに過ぎないこ

との証明を試みるためであったと私は考えます。その意義からすれば、智顛はあらゆる仏典や仏陀の教法が有するそれぞれの価値や効能、そして意義を認めています。これが第一の側面です。

一方で智顛は、教判において明らかに衆生の機根の利鈍や仏陀の教法の浅深に対して判定を下しています。例えば『法華玄義』の冒頭、卷一上で、智顛は様々な角度から繰り返し「此経異諸教」、「異衆経」を論証します（T33.P684a）。ここでは『法華』を「衆経」・「諸教」に対するところの「異」としているのです。この中に価値判断の意味が全くないとは断言できません。実際に『法華玄義』に限っていても、これと同様に『法華』と「衆経」「諸教」「諸教」とを対比して「権実」「僞妙」「偏円」とに判定する例が数多く見られます。「実」は「権」、「妙」は「僞」、「円」は「偏」に対比されますが、これらに高低や優劣の価値判断の意味が全くないとはいえないでしょう。

もちろん智顛は、その他の経や教えの中にも「実」「妙」「円」があり、その部分から言えば、『法華』の「実」「妙」「円」とは全く違いがないことを確かに認めています（これは「迹」の論にすぎず、もし「本」より論ずれば、「本中三十妙、与衆经一向異」となります。『法華玄義』卷二上、T33.P697b）。しかし、衆経が円妙の義を具えていたとしても、せいぜい「帯偏論円」なのであり、『法華』だけが純円至妙なのです。『法華玄義』の中で智顛がたびたび『法華経』を「衆経王」とし、

『法華』総括衆経、而事極於此、仏出世之本意、諸教法之指帰。（『法華玄義』卷二下、T33.P704b23-24）

と説いている通りです。

道理からいえば、智顛は『法華玄義』卷二下において、蔵・通・別入通・円入通・別・円入別・円（純円）の七つの階梯に要約して、四種の四諦・七種の二諦・五種の三諦と一実諦を論じ、諸教の内容の浅深、理を談ずることの融不融、教理の僞妙などを体系的に分析し、「円不帯偏、最妙」（T33.P705a10）と結論付けています。ここでいう「不帯偏」の「円」とは、すなわち「純円」のことです。

また、『法華玄義』卷五下において、智顛は「五味」に要約して僞妙を論じ、

乳教一僞一妙、酪教一僞、生蘇三僞一妙、熟蘇二僞一妙。衆経悉帯縦横方便、説不縦不横之真実、故言為僞。今経正直捨方便、故加之以妙。（T33.P743b14-17）

と述べています。

『法華玄義』巻六下において、智顛は衆経が明かす蔵・通・別・円の四教について
僂妙を論じ、

『華嚴』詮別詮円、三蔵詮偏、方等四種詮、『般若』三種詮、『法華』唯一詮。
又、諸経詮妙与『法華』不異、而帶僂詮、僂詮不得合妙、是故為僂。『法華』不
爾、仏平等説、如一味雨、正直捨方便、但説無上道、純是一詮。(T33.P754c23-27)

と説いています。

『法華玄義』巻九下において、智顛は経の力用を論じ、

一切世人外道智、不及舍利弗智十六分一。二乗智如萤火虫、菩薩智如日光。
通菩薩智如鴻鵠、勢不及遠。別菩薩智如金翅鳥、從一須弥至一須弥。別菩薩智
如爪上土、比仏智慧如十方土。当知仏之智慧、至融・至即・至頓・至実、不可
思議、不縦不横、円妙無比、喻不可尽。問答余経不純説、今経独純説之、此仏
実智力大也。(T33.P797a24-b2)

と説いている通りです。

以上に挙げたのはその一例にすぎませんが、ここからわかる通り、智顛は後の天台
宗の門人たちのように宗派主義の立場から法華円教の超絶性を強調したわけではあ
りませんが、法華円教が衆経諸教に対して「異」であり、「妙」であると考えていた
ことは確かです。そして、「異於衆経」「妙於衆経」という表現には、高低や優劣とい
った価値判断が多少なりとも含まれていたことは間違いないでしょう。

(翻訳担当：山口弘江)